論説

来るを拒まず
浅原健三　別府隠棲の日々

白土康代

はじめに

大正・昭和の激動期を駆け抜けた浅原健三（１８９７～１９６７）。労働運動家でありながら軍部にも太い人脈を築いた「風雲児」だが、謎の多い人物でもある。戦後一時、大分に移り住んで竹田、別府に滞在した。別府での日々を中心に浅原の業績や足跡をたどる。

戦後の混沌に背を向け

世界有数の温泉都市として知られる別府。湯治や観光目的のみでなく、さまざまな事情を抱え、隠れ住むことを余儀なくされた人々の「アジール」（避難所・聖域）という面を持っていた。懐の深い町である。

ロシアの反革命軍指導者セミョーノフ（１８９０～１９４６）や中華民国の大総統だった黎元洪（１８６４～１９２８）らの亡命先となった。明治維新の元勲井上馨（１８３６～１９１５）が若かりし頃、過激な攘夷論派に襲われ、難を避けて別府に潜伏。九死に一生を得たという旅館若松屋は「千辛万苦の場」として今も語り継がれている。別府市中央公民館北側の広場にその姿を残す。

衆院議員時代の浅原健三（1930年ごろ撮影）

戦時中は、「温泉医療基地」として多くの傷病兵を受け入れた。戦災を受けなかったこともあり、戦後は大勢の引揚者や復員兵であふれた。進駐軍の基地建設の特需景気に沸き米兵とその家族、基地建設の労働者らが押し寄せる。無職の世帯が半数近くを占め、それでも酒税納入額が県内一と文字通

りの消費都市であり、混沌（こんとん）とした町であった。

当時の別府で出された雑誌『大分春秋』（１９４７年）の中に思いがけず、「溶鉱炉の火は消えたり」で有名な八幡製鉄所労働争議（20年）の指導者であった浅原の名前を見つけたとき、なぜ彼が混乱の極みにあった別府に住んでいたのか、どんな生活を送っていたのか興味を誘われた。

その随筆のタイトルは「春窓偶感」。当時の世相や浅原の波乱の生涯を思えば、まったく似つかわしくない穏やかなタイトルに、彼の別府での隠棲生活を知りたい思いがいっそう強くなった。表舞台に出ることの少なかった浅原の別府での生活についてまとまった資料は多くない。

江戸期の地理考古学者、古川古松軒の九州地方見聞記である『西遊雑記』に「ながながしき在町」と呼ばれた別府は名ばかりの平野がわずかに海沿いにあるばかりですぐに西に向かってゆるやかな登り坂となっている。別府駅西口を出て、次第に勾配を増していく青山通りを少し進むと、左手にホテル花べっぷ（上田の湯町）がみえる。１９５４（昭和29）年の住宅地図を見ると、その場所に「浅原」とあるのが確認できる。個人の住まいとしては大き過ぎるのも道理で、その前は胡月荘と呼ばれた旅館であった。急激に変化する戦後の混沌とした世相には一切耳を貸さないということであろうか、この屋敷に「聾々庵（ろうろうあん）」と書かれた属額（へんがく）を掲げ、浅原の別府での隠棲生活が始まった。

英雄から一転「国賊」へ

波瀾（はらん）万丈を絵にかいたような浅原健三の生涯を語るにはいくら時間をかけても足らないが、「聾々庵（ろうろうあん）」と名付けた別府の浅原邸へ落ち着くまでの彼の半生をまず簡単に見ておきたい。

浅原は１８９７（明治30）年、現在の福岡県宮若市に生まれた。父の経営する炭鉱が破産。貧しい少年時代を送る。日本大を中退後、社会運動に身を投じる。

彼を一躍有名にしたのは、１９２０（大正９）年の八幡製鉄所労働争議。今の労働基準法につながる画期的な「１日８時間労働」を勝ち取ったのである。農民や労働者には英雄としてあがめられ、28（昭和３）年の初の普通選挙で福岡２区から立候補し、トップ当選。30（昭和５）年の総選挙で連続当選を果たす。

八幡製鉄所の労働争議を舞台にした『溶鉱炉の火は消えたり』を出版、ベストセラーとなる。しかし、31（昭和６）年

に勃発した満州事変に対し、「中国侵略絶対反対」を貫き、「満州からの即時撤退」を叫んだことから、「国賊」呼ばわりされ、翌年に行われた総選挙では落選する。

このことが、彼の大きな転換点となる。軍部の中に入り、石原莞爾（1889～1949）の下で暗躍することになるからである。石原は関東軍参謀として満州事変を起こした首謀者だが、東条英機との対立から予備役に追いやられた。軍事思想家として知られ、戦争拡大に反対だったとされる。後述するが、石原は終戦直後、病を押して別府の浅原を訪ねてきている。2人は特別の絆で結ばれた盟友であった。

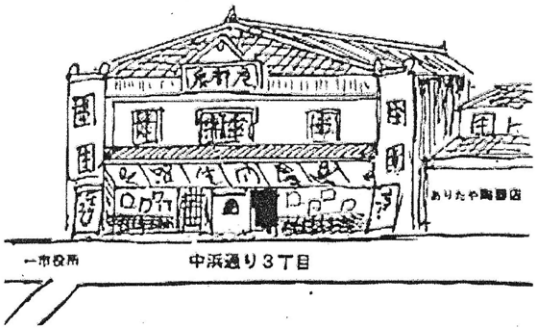
石原の失脚により治安維持法違反容疑で逮捕された浅原は上海で偽名での生活を送ることを余儀なくされる。上海で実業家として大成功。巨万の富を築くが、戦争末期には東条英機暗殺計画への関与を疑われ、身柄を拘束され、日本に護送される。そのまま東京代々木の陸軍刑務所に逮捕監禁され、厳しい取り調べを受ける。44（昭和19）年のことである。

彼は映画好きで、「毎週欠かさず映画館に通っている」と言っていたが、とりわけ洋画を好み、別府では中浜通りにあった洋画封切館の「泉都座」がお気に入りだったようだ。「春窓偶感」（前掲）に、フランス映画「暁に帰る」について、以下のような感想を述べている。

―あの陰惨な警察における犯罪製造制作のごく自然な描写、それでいて陰惨な印象を、いつの間にかぼかしてしまう美しい明るさ。一つの例に過ぎぬが、敗戦国フランスの徹底した自己反省と自己主張から生まれた高いカトリック的なモラルが全巻ににじみでていて敬意を禁じえなかった。

彼の心を捉えたのが、主人公ダニエル・ダリューの可憐さではなく、警察の取り調べ場面であったことに、彼が受けた取り調べの苛烈さが想像できる。

拘束は数カ月続いたが、嫌疑不十分で釈放され、監獄生活に侵された体をひきずるようにして、別府の屋敷へと入ったのは45（昭和20）年の早春であった。しかし、憲兵による暗



洋画好きの浅原健三が足繁く通ったという「泉都座」（絵・安藤允己）

殺の危険を感じた浅原は一計を案じる。

暗殺計画から身を隠し

官憲の暗殺を警戒した浅原健三は一計を案じる。梅雨の憂鬱が彼の危惧を募らせるようなある日、竹田市の社会主義運動家の川口造酒三がひそかに浅原邸に呼ばれた。

川口は1931（昭和6）年から翌32（同7）年にかけ竹田市の稲葉川の水利権を巡って争われた「竹田水田争議」の指導者のひとりである。このとき相談に乗った浅原と知己を得ていた川口が浅原をかくまうことを引き受けたのである。

大分でも空襲が激しくなり、朝地駅（豊後大野市）では米軍の戦闘機グラマンの機銃掃射により12人が即死するなど、戦局は厳しさを増していた。用意された隠れ家は竹田の市街地にある二宮写真館（この写真館は改装されてはいるが、当時の面影を残したまま現存する）の二階であった。ひそかに別府の屋敷を抜け出し、官憲の目を逃れるため、目立ちやすい別府駅を避け、大分市の豊肥線滝尾駅から乗車し、竹田へと向かう。それは8月14日のことであった。

浅原が別府をひそかに脱出したこの日が、終戦を告げる玉音放送の1日前であることは、浅原も川口も無論知る由もない。2002（平成14）年に見つかった浅原の口述筆記にも、彼が竹田の隠遁生活については何も語っていないのはそのせいであると思われる。

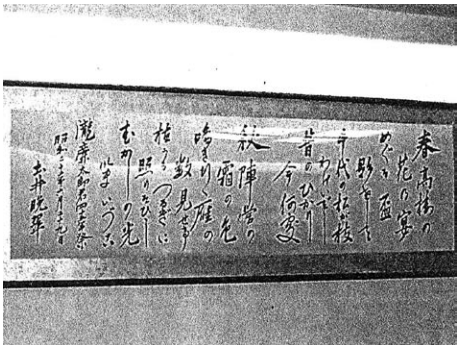
それでも、浅原は危険を冒して文字通り命懸けで自分を引き受けた川口の信義の厚さを深い思いで受け止めていた。老後のすみかとして買い求めていた岡城跡の私有地7万坪（23万1千平方メートル）を1953（昭和28）年には竹田市へ寄贈している。

岡城の本丸跡から北東に「東中仕切り」「御廟所跡」「下原門跡」と細長く続く平地がある。このことを顕彰する1メートルほどの碑が建つことを知る大分県人はあまりいないのではないだろうか。また戦後の人心、世相の荒廃を立て直すには「文化」であると盛んに川口を励まし、岡城の整備開発事業や竹田に縁の深い音楽家、滝廉太郎の顕彰事業を行うように勧め、岡城祉保存会を結成する。

川口の実家である和菓子の老舗「川口自由堂」には詩人土井晩翠（1871～1952）直筆の「荒城の月」の歌詞の額がかかっているが、これは浅原から贈られたものであると川口の義姉の川口和子さんからお聞きした。浅原邸であったホテル花べっぷの庭にも晩翠が書いた「荒城の月」を刻んだ

石碑があるが、いずれも47（昭和22）年に岡城で開かれた「楽聖滝廉太郎追悼四十五周年記念音楽会」に際して、仙台から駆け付けた晩翠が浅原邸に宿泊した際に書いたものである。

終戦直後当時、音楽会とはいえ日本人が集会を持つことは連合国軍総司令（GHQ）より禁止されていたが、占領軍との折衝にあたり、開催を成功に導いたのは浅原健三であったといわれる。別府市中央公民館においても前日に音楽会が開かれ、晩翠があいさつに立った。



「川口自由堂」には詩人土井晩翠直筆の「荒城の月」の額が残されている

「右」から「左」まで来訪

竹田から別府・聾々庵（ろうろうあん）へと戻ってきた浅原健三の戦後生活は、憲兵隊の監視からも自由になった身を祝うかのように「右」から「左」まで、その広い人脈を物語るように実にさまざまな人物の訪問を受けている。

詩人土井晩翠（1871～1952）はもとより、国鉄総裁を務め「新幹線の父」と呼ばれた十河信二（1884～1981）、キリスト教社会運動家の賀川豊彦（1888～1960）、小牧バレー団を創立した小牧正英（1911～2006）、建設大臣を務めた戸塚九一郎（1891～1973）らが浅原を頼って別府にやって来た。

そして、木谷実（1909～1975）や呉清源（1914～2014）をはじめとする多くの棋客たちや、浅原邸のすぐ近くにあった米進駐軍基地の将校たちまでも浅原邸を訪れた。そのうちの一人「ラウル将校」は娘を伴って来た。琴に魅せられた「ラウル嬢」は浅原の紹介で竹田と別府で開かれた「楽聖滝廉太郎　追悼四十五周年記念音楽会」で琴を演奏し、喝采を浴びている。まさに「来るを拒まず」の人であった。

1948（昭和23）年春、聾々庵は彼の故郷である福岡・鞍手の木屋瀬町青年団5人の訪問を受けている。その一人、「母校の先輩として氏を持つことを天下に誇りたい」と言う青年団団長は、のちに『八幡製鉄外史』の著者となる安田富彦氏である。

ガリ版刷りの彼らの青年団団報『共生』掲載の「しとしと降る春雨をついて吾々共生会会員の5人は一世の風雲児

浅原健三氏の門を叩くべく、湯の町別府を訪れた」で始まる訪問記「浅原健三氏を訪ねて」には、故郷の英雄に対座した青年たちの感激ぶりや屋敷の見事さが書かれている。

―二階の座敷に通された。豪勢な調度品、火鉢や花瓶やその他いろいろな書画骨董の類が、座敷によく調和するように配置してあり、この家の主の品格がしのばれた

―氏の口許を凝視して波乱万丈の人生哲学より発する浅原イズムは烈々火を吐く如く、時に春風清流の如く、こんこんとして尽きることがなかった

労働者のために、または日中戦争回避のために命を賭して働いた郷土の先輩の口から出る言葉に、戦後の混迷の中でこれからの日本の在り方を模索していた青年たちは「夜の更けるのも忘れて」耳を傾けた。

現在「ホテル花べっぷ」が立つ浅原健三邸には数多くの人が訪れた

安田青年はこのときの「青年よ、現代の異端者たれ」という浅原の言葉をもっとも感銘深い訓えとして心にとどめ、町政の民主化に奮闘することになる。浅原自身も彼らの求めに応じ、「祖国現下の民主主義に就いて」と題する論考を『共生』に寄稿している。青年たち相手に話題は社会政治経済問題だけではなく、「衣装芸術」や「東洋における美術工芸」にもおよび、浅原が蒐集していた刀剣、国宝貞宗なども披露される。

文化国家として再興を

故郷の福岡・鞍手の青年たちに「国宝貞宗」を披露した浅原健三は、刀剣の蒐集家としても知られ、国宝に指定された刀を二振りとなぎなたを一振り持っていた。

連合国軍総司令部（ＧＨＱ）が行った武装解除を目的とする刀剣の破棄や没収に対して、美術品としての刀剣を認めさせようと「日本美術刀剣保存協会」の設立にも尽力し、別府においても刀剣会を開いている。

また１９４８（昭和23）年３月には中津文化連盟と中津経済同友会に招かれ、明蓮寺（中津市桜町）において「陶器に

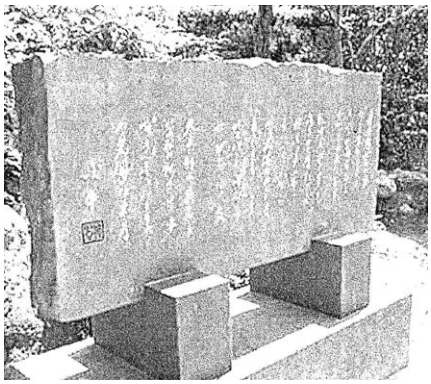
関する研究を聴く会」で話をしている。刀剣だけでなく美術工芸品にも造詣が深かったことが察せられる。

さらに、戦後の人々の荒廃を少しでも潤すために別府駅の休憩室を利用し、女子職員に茶の湯を教えることを提案した。彼の娘がその指導に当たったことが地元誌に記録されている。

戦後の混乱の中を「文化国家」へと生まれ変わろうとしていた日本のエネルギーが「世に出ることを極端に嫌い」、世俗の騒音に耳をふさぎ、聾々庵（ろうろうあん）に閉じこもるはずであった彼をとらえていたことが伝わってくる。

日本を文化国家として再興すること。それは隣国との不幸な戦争を、命懸けで阻止しようとした彼が、戦後に見た夢といえるかもしれない。随筆「春風偶感」にその夢をうかがうことができる。

―国家社会の世界的な看板は政府ではなく、芸術とか言論界が大きな看板の役目をつとめている。日本の品位を外国人が定める場合、日本の思潮的傾向をその尺度とする。言論界の在り方によって、その国の品位を価値づける（略）彼（※内山完造）は一介のボロ本屋の主人に過ぎないが、四十年間一日の如く日本の書籍を支那に輸出し、支那の学芸を日本に輸入して、その功績を認められて、現在の中国に重んぜられているのである



浅原邸だった「ホテル花べっぷ」の庭にある詩人土井晩翠が書いた「荒城の月」を刻んだ石碑。戦後、浅原健三は「文化」へ傾倒した

浅原が別府に住んでいることを知って、いくつかの地元紙がインタビューを行っている。そのひとつ「別府タイムス」の「怪物月旦」の見出しには「往年の闘士・風雲を呼ぶか　文化と経済を両天秤（てんびん）」とあるが、彼自身は「政治や社会運動には我関せず」とばかりに、観光や保養都市としての別府の発展策を語り、別府市民に対しては文化による市民道義の涵養（かんよう）を求めている。

温泉の町・別府に居を構えた浅原の隠棲（いんせい）の日々は、「文化と経済を両天秤」というより、むしろ文化一本やりの感がある。

※注　内山完造（1885～1959）1917（大正6）年以降、

上海に書店を経営。魯迅らと親交を結ぶなど、日中交流に尽くした人物。中国で反戦連動を展開していた、大分出身の作家、鹿地亘（１９０３～１９８２）を助けたことでも知られる。

囲碁手始めに文化立国

文化の力をもってして「市民道義」を高めることを、別府発展策の第一に挙げた浅原健三であるが、彼が何よりも力を入れたのは、彼の最大の趣味であった囲碁である。

聾々庵（ろうろうあん）には木谷実（１９０９～75）、瀬越憲作（１８８９～１９７２）、岩本薫（１９０２～99）をはじめとする大勢のプロ棋士が訪れ、盛んに碁会が開かれた。費用は全て浅原がもち、碁会が終われば「食事が出た。ご飯は銀シャリ、おかずには別府湾でとれた新鮮な魚の刺し身や煮付けが並び、酒もでた。都会の深刻な食糧事情がうそのようだった。それに温泉までついていたのだから、まさに別世界だった」（桐山桂一『反逆の獅子』より引用）という。並外れた力の入れようである。

日本棋院の機関誌である『棋道』昭和22年7月号には、「北九州の強豪　相会して打つ　於　別府市浅原氏宅」というタイトルで、本因坊の岩本が評解した棋譜が載っている。岩本が来別した際に、聾々庵に集まったアマの強豪たちが、プロ棋士と相交じって打った連碁（2組に分かれ、一局の碁を代わる代わる打つこと）の棋譜である。一人5手宛で行っている。総合プラント工事会社の高田工業所（北九州市）の創業者である故高田寿夫氏の名前も見える。

49（昭和24）年1月に呉清源（１９１４～２０１４）と岩本薫の「本因坊打込み十番勝負」が行われたとき、その第九局（26、27日）は別府の日名子旅館で開かれたが、呉が別府に来るというので大勢の囲碁ファンが別府を訪れ、浅原邸で呉の指導碁が行われた。

また、同じ49年に日本棋院の昇段制度による初の九段にわずか31歳で昇段した藤沢庫之助（１９１９～92）に「名人になると碁を打たなくなる傾向があるようだが、藤沢氏にはますます打ってもらいたい」と、浅原自らが「箴言（しんげん）」を呈するなど、囲碁界においての発言力も相当にあったと思われる。

「観光別府」（1950年掲載）の浅原健三エッセー「碁」に添えられていた日本棋院九州本部の広告。浅原の尽力で別府に九州本部ができた

浅原は「春窓偶感」で碁について以下のように語っている。

―僕は碁が好きで、民国にいるとき、中国棋院を創ったことがある。この碁を通じて、国際親善を図ろうという相談が最近持ち上がり、既に、米国では百五十人ばかり同好の士が結成され、また民国にも多数の棋客が待機し、国際囲碁大会が創立されたら、まず、中華民国から代表を招待し、次にはアメリカから招くということになっている。

このように囲碁は刀剣に並ぶ彼の趣味であったが、囲碁による国際親善を計画するなど、単に自分の趣味にとどまらないところが浅原健三であろう。

文化立国日本の建設、囲碁による国際親善と彼の思いは広がっていくが、その第一歩として行ったことが、別府に日本棋院九州本部を開くことであった。

「九州本部」昇格に尽力

もともと、別府は囲碁が盛んな土地であった。日本棋院別府支部が創設されたのは１９２８（昭和３）年である。

翌29年1月には、東京の「大倉男爵」の寄付金３５００円を元に、別府市と日本棋院別府支部の協力で木造瓦ぶき2階建て、敷地面積１３０平方メートル、建物面積２１７平方メートルの日本家屋が別府駅近くの海門寺公園の北端、海門寺温泉東側に新築された。

これによって別府の囲碁界はさらに勢いを増し、別府をはじめ県内で多くのアマチュア棋士が活躍した。浅原健三は、この別府支部を九州本部へと格上げすることを計画する。本部に昇格するということは、西日本各地の昇入段者の日本棋院免状は、この別府の九州本部を通じて与えられるということになる。

まず、48（昭和23）年2月11日に、日本棋院大分支部は棋院を解消。新たに九州本部を別府市海門寺公園に設けるために、解散式と記念囲碁大会を開いた。

その後、設立のための動きが一気に進んだ。日本棋院の篠原正美六段（当時）が、本部設立の相談のために浅原邸を訪れていることが「九州旅日記」（『棋道』昭和24年2月号）に書かれている。九段を極めた篠原は福岡出身の棋士でこの年から、82歳で亡くなる86（昭和61）年まで九州一円の囲碁指導旅行を続けた。

その「九州旅日記」で篠原は次のように記している。長く

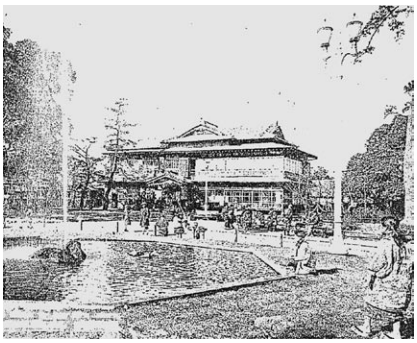
なるが、浅原が囲碁にいかに力を入れていたか、その情熱がうかがえるので紹介したい。

―（昭和23年）6月下旬から9月中旬に亘（わた）った九州滞在は私の生涯を通じ多忙をきわめた点が記録的であった。下関と九州全県下で同好のみなさんとの対局および解説に対し熱心であったことや熱意のこもった接待ぶりは私の想像以上であっただけにすこぶるうれしい思い出となっている。

―6月25日門司港発高田氏（北九州市の総合プラント工事会社、高田工業所の創業者である故高田寿夫）と同車して別府に行き浅原健三邸宅に着いた。浅原先生にはお宅を別府滞在中の本拠にしていただいた上、種々お世話になり恐縮に堪えない。

―26日浅原邸で中津の橋本定三段、大分の清水政七二段、別府の谷洋三郎四段（略）にご主人（浅原）を交え九州本部設立の相談があった。東京や関西から先生方を迎えることや、各地支部その他への招待状が発せられる事が決まり、翌日も引続いて具体的運びが討議されたが、皆さんの真剣な態度に心うたれ、この上は九州本部のために、全力を尽くしたいという気持ちの自然におきてきたのも当然の成行きであった。28日は新別府の林満邸に行き、28日は日名子旅館に岡本忠夫氏を訪問、それぞれ対局解説をした。

九州全域に、広く囲碁の普及を図るために浅原邸が根城となっていること、浅原が陰になり日なたになり尽力していることがひしひしと伝わってくる。



海門寺公園に建てられた日本家屋。後に日本棋院九州本部となった（写真一部修正）

終戦直後　棋界に勢い

浅原健三が力を注いだ日本棋院九州本部が設立されたのは、1948（昭和23）年夏のことである。

7月25日に、設立祝賀記念囲碁大会が華々しく行われた。日本棋院からは理事長の瀬越（せごえ）憲作八段、大分、別府でたびたび指導碁を行う「木谷会」を開いていた木谷実八段、また橋本宇太郎八段が祝いに駆け付けた。広島に原爆が投下された45（昭和20）年8月6日に岩本薫七段との「原爆下の対局」

で有名な橋本八段である。

以下、篠原正美の「九州旅日記」から設立大会の様子を引く。

―25日は午前8時から海門寺公園の九州本部楼上の大広間で九州本部設立大会が挙行された。浅原健三氏を座長に擁し岡本忠夫氏を理事長として各県より理事を選び、挨拶(あいさつ)その他型とおりを行い、式は無事に終了した。引き続き午前10時より夕刻まで本部結成祝賀囲碁大会が催されたが、当日は別府始まって以来の高段者および有段者の集まりの多い日であった…

この日、晴れて日本棋院九州本部となった海門寺公園の建物の玄関には、木の香もすがすがしい「日本棋院九州本部」の大きな看板が掲げられたが、それは瀬越八段の手になるもので、別府の棋客たちの自慢となった。50面の碁盤を備え、名古屋、札幌、別府と三つある日本棋院本部の中でもっとも設備がよく、福岡出身の篠原六段が最高師範として常駐した。

戦後、大陸から引き揚げてきた有段者たちの中にはそのまま別府に住んだ者も多く、別府における棋界の隆盛に拍車をかけたと浅原は指摘する。例えば、46（昭和21）年に「別府に十六才の天才棋士現はる」と話題になった加田克司(かだかつじ)。後に九段まで上り詰め、加納嘉徳、大平修三両九段とともに戦後の三羽がらすといわれた加田は当時、別府中学（現・別府鶴見丘高校）3年生であった。家族とともに中国・天津から別府へ引き揚げて、亀川町に住んでいた。

有段者であった父と祖父から手ほどきを受け、引き揚げてきてからは、やはり引揚者である秋葉町の有段者谷洋三郎から指導を受けていた。めきめき腕を上げ、たまたま別府を訪問していた木谷八段と対局。5子の置碁で勝ちを収め周囲を驚かせ、木谷実に入門を許された。木谷門下、戦後初の内弟子である。入門式は浅原邸で行われた。読みの力を養う絶好のトレーニングともなる詰碁(つめご)制作の第一人者として知られる。96（平成8）年に亡くなった。

被災を免れ、大勢の引揚者を迎え入れたという別府の戦後事情に加え、別府支部が九州本部に格上げされ

対局中の加田克司（右）。棋界で戦後の三羽がらすといわれた才能は別府で育まれた（日本棋院提供）

たことで、別府の棋界は一気に力をつけ、毎年のように九州都市対抗囲碁大会を開いた。一時は数百名に上る有段者をかかえ、西日本に「別府おそるべし」の声が聞こえたという。

「別府定石」とはいかに

浅原健三が別府を去るのは終戦の混乱後、朝鮮戦争（1950～53年）がもたらした特需景気により、日本の経済が上向きになり始めた1955（昭和30）年ごろである。

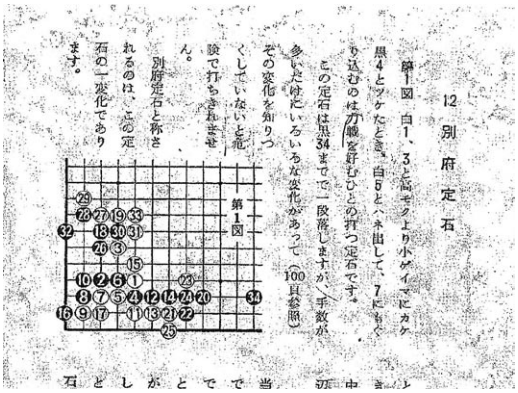
浅原が開設に尽力した日本棋院九州本部は、その後曲折を経て、62（昭和37）年に福岡へと移される。別府に残された建物はそのまま日本棋院別府会館として、長く別府の囲碁愛好家を迎え続けていたが、時とともに老朽化が進み、2008（平成20）年に取り壊された。

―棋院本部のある海門寺公園は名刹・海門寺をひかえ、老松のゆかりも深い小公園であり、その一角に建てられた本部は二階楼で、階上は二十四畳の大広間と二十畳の二室をもち、南室は一間の回廊をめぐらし、高崎山に対峙し、終日明るい陽ざしに恵まれている。階下も十分な設備を持ち、棋客は絶えない。

海門寺公園の一角にあり、風景の一部として公園に溶け込み市民に親し心まれていた会館は、今はない。浅原が筆をとったこの文章（「碁」『観光別府』昭和25年）がなければ、時とともに、そこに棋客でにぎわった建物があったということも人々の記憶から消えてしまうだろう。

囲碁について、筆者は全くの無知であるが、今回、「別府定石」という打ち方があることを知った。一説には別府にやってくる湯治客に賭け碁をもちかけ、金を巻き上げるきわどい打ち方につけられた填め手とも聞いたが、1957（昭和32）年に出された「瀬越囲碁文庫」を開くと、第一、第二別府定石の説明が20ページにわたって詳しく述べられている。

「ツケノビ定石」、「キリチガイ定石」、「高ガカリ定石」などはその名前から素人ながら漠然とイメージが浮かんでくる



瀬越囲碁文庫で紹介されている「別府定石」の解説図

気がするが、こうしたタイトルに並んで、「別府」という地名を見つけた時は奇妙な気がした。

中国定石、台湾定石といった国名でもなく、なぜ地方の小さな町の名がつけられたのか不思議でならなかった。他には都市の名を冠した定石は載っていなかったから、余計に興味を引いた。

瀬越囲碁文庫にある「定石といわれるだけあって、一概に填め手と断ずることはできません」「力戦を好む人の定石で（略）さまざまな変化があり、その変化を知り尽くしていないと危険で打ち切れません」などという説明から、「別府定石」のあやうさ、きわどさがうかがわれる気がした。

こうした説明を読むと、戦前・戦中を通して、「竜の雲を得る如し」というように、命の瀬戸際を何度も切り抜け、駆け抜けて来た浅原が、別府・聾々庵（ろうろうあん）で過ごした囲碁三昧ともいえる日々に結びつけたい気がふと起きてしまうのは筆者だけだろうか。

日本の再建を目指して

終戦直後の１９４５（昭和20）年の暮れ、旧日本陸軍幹部の石原莞爾（１８８９～１９４９）が、故郷の山形から浅原健三をひそかに訪ねてきた。

戦犯として逮捕される恐れも十二分にあった石原の状況や当時の交通事情などを考えれば、彼が何としても盟友・浅原と相見えて語り合いたいと強く願ったことが感じられる。７年ぶりの再会であった。

山形県鶴岡市の郷土資料館には、この訪問に対する浅原の礼状が残されている。無事の再会の喜びと「種々の教示」を受けたことへの礼を述べ、いずれ山形に「参上し膝下にて親しく今後の進退に就きご指導を」と認められている。

石原は、満州事変の立役者として知られているが、日中戦争回避に腐心し、在任中に日米開戦（太平洋戦争）に踏み切った東条英機首相と対立したことでも知られる。

敗戦後、「武器なき日本は世界にさきがけて、最高文明社会を建設し、身をもって人類史を恒久平和に導くべき天命を拝受した」とも説いた石原と、「文化立国」として日本を再出発させようと試みた浅原は、日本の行く末について、語り明かしたにちがいない。

おわりに

―碁と温泉はどこかぴったりした感じを与える。湯治客

が退屈しのぎにパチリパチリと烏鷺を闘わしている様は、温泉らしいのどかさがあり、現実の中の一つの澄み切った世界でもある。別府の棋界が今日日本棋院九州本部となったことも、こうした環境からあえて不思議はないのである。

石原莞爾元陸軍中将。浅原健三とは盟友だった

これは、浅原が『観光別府』（昭和25年）に残した「碁」と題するエッセーの冒頭である。これだけを読むと「老松のゆかりも深い静かな公園」の一角にあった二階楼を思い出す人もいるだろう。しかし、当時、九州本部のあった海門寺公園には戦争の傷跡がそこかしこに見られた。

家なき人々が小屋をかけ、街娼が立ち、闇の取引が行われた場所であった。東京から浅原を訪ねてきた日本棋院職員の松井昭夫が「海門寺公園のルンペンがお腹を割いて食べてしまうからと、飼い猫が外に出ないように縛られている」のを見て、戦後の世相を嘆いている。

聾々庵の主人といえども、そうした現実が聞こえてこないはずはなかっただろう。しかし、文化による日本再建を目指していた浅原はそうした混沌とした現実の中に「一つの澄み切った世界」を見ていたのかもしれない。

67（昭和42）年、浅原が70歳でその疾風怒濤のような生涯を終えたとき、死亡広告には「政財界の影の人物」とあった。彼が隠棲の日々を送った聾々庵は、その後、大内山旅館となり、国鉄共済組合保養所ひかり荘から、ＪＲ別府荘となり、「ホテル花べっぷ」へと移り変わる。

彼が別府に残したものは、姿を変えてこの町のどこかに息づいているのだろうか。

本稿は、西日本新聞に掲載（平成28年5月17日～6月1日、10回連載）されたものを、同社の許諾を得て転載したものである。若干の修正を加えている。